



日本大学 大学史ニュース

2026.09
Vol.31

日本大学広報部広報課（大学史）

目次

- ◇創立者・野田（長森）藤吉郎の訳書『五日紀変 英雄之肝胆』 2
- ◇「日本大学新聞学会支那満鮮視察旅行」のアルバム 3
- ◇創立期講師の集合写真（司法省法学校3期生） 4
- ◇川上音二郎を支えた金子堅太郎 6
- ◇戦没学徒 山谷進陸軍中尉について 7



日本大学病院で大学史展示を始めました

このたび、駿河台の日本大学病院1階オープンラウンジにおいて、来院の皆様には日本大学の歴史について知っていただけるように、パネル展示を開始しました。

第1回は、「医学部の100年」と題し、令和7（2025）年に100周年を迎えた本学医学部の歴史について、特に駿河台病院を中心に取り上げました。

◆創立者・野田（長森）藤吉郎の訳書『五日紀変 英雄之肝胆』



野田（長森）藤吉郎

日本大学創立者11名のうちの一人・野田藤吉郎は、佐賀県の出身で、明治13（1880）年に司法省法学校に第3期生として入学しました。在学中に司法省法学校が帝国大学に吸収され（詳しくは4ページ参照）、21年7月に帝国大学法科大学仏法科を卒業します。卒業後は司法官僚としての道を歩み始め、のちに同郷で司法省の有力者である長森敬斐の婿養子となり、長森姓になります。

帝国大学在学中の野田が発行した珍しい訳書があります。『五日紀変 英雄之肝胆 上篇』と題し、『レ・ミゼラブル』の作者としても有名なヴィクトル・ユーゴーのエッセイ“Histoire d'un crime”（「ある犯罪の歴史」）を翻訳したものです。「栄城居士」（野田栄城）の号名で明治20（1887）年4月1日に博文堂（東京）・文海堂（大阪）より刊行されました。校閲は元老院書記官の有賀長雄が担い、序文はフランス語教師の今村有隣（当時第一高等中学校教諭兼東京商業学校教諭）が、跋文は友人の「天囚居士」（西村天囚。野田と同時期に帝国大学に在学）が執筆しました。

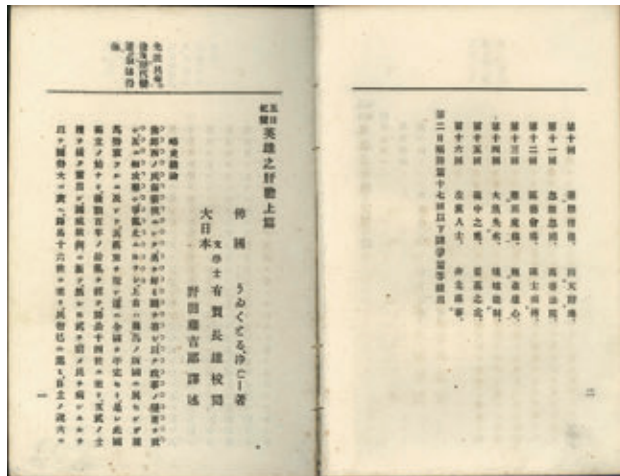
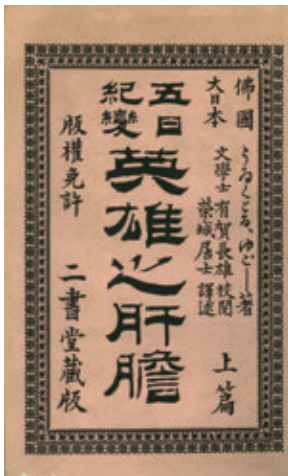
原書は、ルイ・ナポレオン（ナポレオン3世）による1851年12月2日のクーデターについて、弾圧の対象となりフランスを離れたユーゴーが、亡命先のベルギーで翌1852年に書き上げたものです。長らく刊行されずにいましたが、ルイ・ナポレオンが廃されユーゴーがフランスに帰国した後、1877年に一部を追記して公開されました。

野田による「凡例」（明治19年12月付）には、「今訳スル所ノ書ハ、七年間ノ発兌ニシテ、五十八版ニ係ル、今や則チ殆ト七十版八十版ニ上ルコト知ルベシ、歐洲ノ人士、此書ヲ珍重スル如此、而シテ我国未タ之ヲ訳述スル者有ラズ、豈ニ千古ノ遺憾ニ非ラザル乎、是レ余輩ノ此挙アル所以ナリ」と、欧州では版を重ねて読まれているこの本が日本では全く翻訳されていないことから、自ら発刊を決意したことが記されています。翻訳は漢文訓読体で行われました。

この訳書について、明治文学の研究者である柳田泉は「全訳といふ点でユーゴー紹介史に特筆されるべきものが、上下二冊の予定のところ、上篇だけより刊行されてゐない」「ちよつと読み辛いが、先づ佳い訳の方だ」（柳田泉「ユーゴーの日本に及ぼせる影響」）と、下篇が刊行されなかったことを惜しみつつ、概ね良い訳書であると評しています。

本書が刊行された当時、日本では憲法の発布に向けての準備が進んでいました。法学の徒である若き時代の野田にとって、近代法をもつ「先進国」であるフランスの政治が辿った道について政治家でもあったユーゴーの手で記されたこのエッセイは、非常に興味深いものであったのでしょう。

（上野平）



ヴィクトル・ユーゴー著・栄城居士（野田藤吉郎）訳述
『五日紀変 英雄之肝胆 上篇』表紙及び本文

【主な参考文献】

辻和『ヴィクトル・ユーゴーの生涯』（潮出版社、昭和54年）
小野浩訳『罪の歴史』（『ユーゴー全集 第十一巻』株式会社冬夏社内ユーゴー全集刊行会、大正10年）
柳田泉「ユーゴーの日本に及ぼせる影響」（谷川恵一他校訂『随筆 明治文学1 政治篇・文学篇』（平凡社、平成17年。初出は『報知新聞』昭和10年6月14-18日）

◆「日本大学新聞学会支那満鮮視察旅行」のアルバム

『日本大学新聞』を発行していた日本大学新聞学会が創立から10周年を迎えたことを記念して、昭和4（1929）年7月から8月にかけて、「支那満鮮視察旅行」と題し、中国大陆から朝鮮半島にかけての新聞研究調査の視察旅行を実施しました。本稿では、当課が所蔵するこの時のアルバムについて紹介します。

アルバムを製作したのは、当時、日本大学新聞学会の常務委員を務めていた國井忠勝（昭和5年商学部経済学科卒）です。

視察旅行のきっかけは、山岡萬之助学長から日本大学新聞学会の役員6名に対し、夏休みの調査旅行費用として1人あたり100円の予算を提供する旨の打診を受けたことによります。この頃の日本大学の授業料は年額110円（法文学部・商学部）。山岡学長が提示した1人あたり100円、6人で600円という旅行費用は、当時の学生たちにとって大金でした。

山岡学長の打診を受けて、新聞学会の学生たちは大陸への視察旅行を計画しました。商学部学生にも声をかけ、最終的に新聞学科6名に商学部学生7名と引率教員の松葉栄重を加えた計14名の視察団となりました。

一行は7月15日に列車で東京を出発、翌日神戸から船に乗り、長崎を経由して上海に到着しました。その後、南京、青島、大連、旅順、奉天、撫順、安東を巡ったのちに朝鮮半島に移動し、平壤から京城、釜山を訪問し、8月4日に帰国しました。

視察団は行く先々で日大OBの歓迎を受けつつ、現地の新聞社や文化等について視察しました。帰国後、『日本大学新聞』でその成果や学生たちが詠んだ詩等が数号にわたって掲載されました。記事では楽しい交流のことや日本との文化の違い等が語られるとともに、当時の日本人が置かれた状況についても触れています。例えば南京滞在時の記事では、浴衣で外に出ようとしたところ宿の主人から「排日の本場だから、うつかりすると日本人だと思ふとからかはれたり、へまをすると殴られる」（『日本大学新聞』第141号、昭和4年9月20日号）と注意を受けたと記しています。彼らの渡航前年に奉天事件（張作霖爆殺事件）が起きるなど、時勢的には決して安全とは言えませんでした。アルバムにはその一端がうかがえる写真も貼付されています。

『日本大学新聞』での報道だけでなく、日本大学講堂での報告会も行われました。のちに國井は『日本大学新聞五十年の歩み』（日本大学新聞社、昭和46年）掲載の回顧録「楽しかった大陸旅行」において、報告会で「この旅行で我々が特に感じたことは、支那人に対する、日本人の態度が、余りに高慢であることであった、排日感情が起ること当然の様に思われた、我々若者はこれが改善に努力すべきだと主張した」と振り返っています。

学生達にとって、日本の生活との違いや当時の日本の海外における立ち位置を身を以て体験できた、生涯記憶に残る旅となったようです。

（上野平）



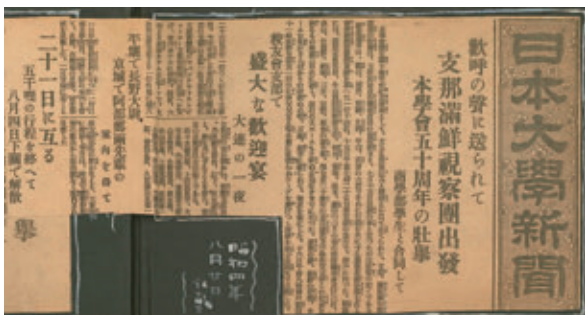
アルバム「支那満鮮視察旅行」表紙



上海での集合写真



南京の孔子廟で撮影した写真



アルバムに貼付された視察旅行の様子を紹介する記事
（『日本大学新聞』第139号、昭和4年8月20日付）

◆創立期講師の集合写真（司法省法学校 3 期生）

本学の前身である日本法律学校は、明治22（1889）年、宮崎道三郎、金子堅太郎などの若手法律学者11名を創立者として誕生しましたが、その中には司法省法学校 3 期生である長森（野田）藤吉郎、上條慎蔵が含まれています。

司法省法学校は、明治 5 年 7 月、司法省明法寮において、フランス法習得の準備課程としてフランス語を教授する学校を開いたことに始まります。修業年限は 8 年で、正則科は語学習得の予科が 4 年、本科が 4 年でした。予科が修了して本科に進むと、新たに新入生をとるというシステムだったため、司法省法学校は補欠入学を除くと明治 5～17 年までの間に 4 期しか入学期がありませんでした。そのためか、同期の結束力が強かったようです。

表 1 は、明治25年、東京の私立法律学校における司法省法学校出身者の講師数を示したものです。明治大学の前身である明治法律学校は、創立者 3 名が司法省法学校 1 期生であり、明治25年の時点でも 1 期生の講師が多いことがわかります。和仏法律学校（現・法政大学）は、2 期生の梅謙次郎が学校運営に関わっていた時期でもあり、2 期生の講師が多いのが特徴です。明治・和仏はともにフランス法を教授する学校として創立されたため、フランス

法を学んだ司法省法学校出身者講師が多いことは当然なのですが、入学期ごとにグループが形成されているのが特徴といえます。

日本法律学校は、明治21年に卒業した司法省法学校 3 期生が多いのが特徴です。3 期生は帝国大学に合併された後の卒業であるため、帝国大学法科大学仏法科の卒業となります。明治25年に講師だった人物は、創立者長森、上條の他、石尾一郎助、板垣不二男、応当衡、太田峰三郎、柿原武熊、木下友三郎、水町袈裟六の 9 名です（講師として名前が記載され

ているものの、実際には授業を持たなかった人物も含まれています）。このうち、長森、上條、石尾、応当、太田の 5 名は、明治25年当時、日本法律学校でのみ講義していました。その他、横田秀雄は明治30年代より日本法律学校講師となりました。のちに、木下、横田は明治大学学長、総長に、水町は法政大学総長に就任しています。

日本法律学校の創立者11名が本格的に取り上げられたのは、『日本大学百年史』からです。百年史では、創立者のうち 8 名がドイツに留学している点、ドイツで歴史法学の薫陶を受けて日本法律学校創立を企図した可能性があることを指摘しました。ただ、創立者11名の中に欧米留学経験のない長森と上條がいることの理由は不明でした。近年、明治22年創刊の雑誌『法政文』の執筆者の中に、本学創立者が 8 名も含まれていること、同雑誌第 2 号に日本法律学校設立主意が取り上げられていることが分かり、宮崎、金子、本多を除く 8 名の創立者は、この雑誌『法政文』のグループから日本法律学校創立に合流した可能性があることを指摘しました（本誌13号参照）。この雑誌は、明治21年帝国大学卒業生が執筆者として多く参加していることから、長森、上條も雑誌『法政文』創刊のために集まり、その後、日本法律学校創立に参画したと考えられます。

このように、日本法律学校の創立当初、司法省法学校 3 期生のグループが創立者、講師などの役割を担っていました。この司法省法学校 3 期生の集合写真が、大正 3（1914）年 1 月発行の雑誌『成功』に掲載されています。『成功』は、立身出世を目指す苦学生や地方青年を読者対象として、成功者の体験談などが掲載されており、当時、人気の雑誌のひとつでした。紹介する写真は、清川乾々居士の「学生時代の性格と卅三年後の成績」という文章とともに掲載された写真で、著者は司法省法学校 3 期生であった清川伊太郎と考えられます。清川は、手元にあった古い集合写真から、33年後の彼らの動向を記しています。

例えば、長森については、官僚としても相当の地位に昇り又朝鮮等に赴いて種々事業にも従事したと記し、日本法律学校講師であった柿原武熊については、容貌、態度ともに「武熊」の二字が最も適当であると、無骨な人柄だったことを紹介しています。横田秀雄については、初めより学問が最も秀でていたとし、学生時代から将来を嘱望されていたので、彼が出世するのは当然の結果であると記しています。

表 1 司法省法学校出身の私立法律学校講師（明治25年）

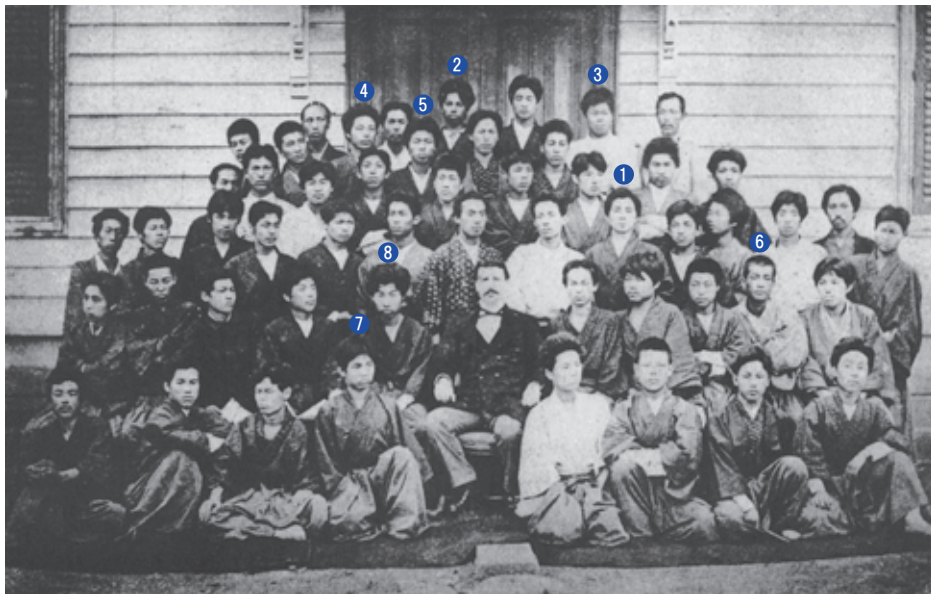
	専修	法政	明治	中央	日本	早稲田
1期生	0	3	13	0	2	1
2期生	4	10	6	1	7	1
3期生	5	3	3	0	9	1
4期生	0	2	2	0	1	0
速成科	1	0	1	1	1	0
計	10	18	25	2	20	3

参考文献（7）記載の一覧表をもとに作成。
校名は現在の大学名で示した。

この写真の2列目中央の人物は、3期生の仏語教育を担当したアントアヌ・ファブル（Antoine Fabre）です。ファブルは明治14年8月に退任していますが、本写真の撮影年も明治14年8月と記されていることから、ファブル退任前に撮影された集合写真と考えられます。雑誌掲載当時は、写真撮影から33年が過ぎているため、著者の清川もすべての人物を把握できなかったようで、52名中12名の名前が不明となっています。そして、この不明とされる人物中に創立者のひとりである上條慎蔵もいると考えられます。上條は、晩年の写真が確認されているだけで、これまで他の写真は確認できていませんので、あらたな写真を発見できるヒントとなるかもしれません。

日本法律学校は明治26年の第1回卒業式の前日、廃校が決議され、それを知った卒業生と教員たちが再興運動に取り組みましたが、そのひとりが、創立者で幹事の長森藤吉郎でした。長森は明治26年9月に幹事を辞任しますが、その後任には、同じ司法省法学校3期生で同郷出身の片岡静輔、その後、同じく3期生の石尾一郎助が就任しており、司法省法学校3期生は、廃校問題が発生した時期に学校運営の重要な役割を担っていました。

廃校問題を抱えていた日本法律学校は、卒業生や長森たち司法省法学校3期生の尽力もあり、前検事総長の松岡康毅を校長に迎えて、無事に再興を果たしました。この写真は、廃校となりそうだった日本法律学校を支えた創立者・講師陣の若き姿を映した貴重な一枚といえるでしょう。（松原）



司法省法学校3期生の集合写真（『成功』第26巻4号、大正3年、国立国会図書館デジタルコレクションより）
日本法律学校の関係者は、①長森、②柿原、③木下、④水町、⑤片岡、⑥太田、⑦応当、⑧横田。板垣、石尾は明治15年9月補欠入学のため、この写真には含まれていない。

【参考文献】

- (1) 司法省編『司法沿革誌』（昭和14年、法曹会）
- (2) 手塚豊「司法省法学校小史（2）」（慶應義塾大学法学研究会『法學研究：法律・政治・社会』40巻7号、昭和42年）
- (3) 三上敦史「雑誌『成功』の書誌的分析—職業情報を中心に—」（『愛知教育大学研究報告 教育科学編』第61輯、平成24年3月、愛知教育大学）
- (4) 『日本大学百年史』第1巻（平成9年、日本大学）
- (5) 松原太郎「創立者と雑誌『法政文』」（『日本大学大学史ニュース』13号、平成29年、日本大学企画広報部広報課）
- (6) 松原太郎「日本法律学校と創立者—雑誌『法政文』から見えてくるもの—」（『鸞誌』第18号、令和5年、日本大学企画広報部広報課）
- (7) 松原太郎「明治中期の私立法律学校講師について—兼任状況・職業・居住地—」（法律学校研究会編『明治期私立法律学校教育の相似と相違—講義録・講師履歴・学生資料の比較分析—』、令和6年）

◆川上音二郎を支えた金子堅太郎

川上音二郎（1864-1911）は博多の商家に生まれ、明治10（1877）年東京に出奔、福澤諭吉と知り合い慶應義塾の塾僕（住み込みのアルバイト学生）になりました。学問より学生演説会に熱心で、人の心を掴む話し方のコツを学びました。自由民権運動が盛んな10年代後半には政党の壮士となり、21年には大阪で寄席に出演すると、壮士演説の政府批判を七五調で歌った「オッパケペー節」が大ヒットしました。24年、堺で壮士（書生）芝居を始めましたが、演説は上手くとも芝居は素人の集まりで失敗に終わりました。次に東京進出を狙い、同年6月、浅草にあった中村座で壮士芝居を公演。ここでは大成功を収めて、第2回・3回と続けることとなりました。

壮士芝居は、身分の高い人々への批判が含まれていましたが、如才のない音二郎は、彼らとつながりを持つことを厭いませんでした。この頃に知り合ったのが、貴族院書記官長で日本法律学校校長も務めていた、同郷の金子堅太郎でした。中村座公演には、大臣クラスの政治家に加えて有栖川宮熾仁親王も来臨されました。これには、金子

ありすがわのみやたるひと

からの推挙があったと考えられます。25年5月には、東京慈恵医院にお成りの皇后陛下の前で上演しましたが、これも金子の尽力によるものでした。同年、金子は国際公法学会で演説するためジュネーブに向かいました。渡欧する際には音二郎を連れていく約束をしていましたが、一座が人気のため叶いませんでした。音二郎は翌26年1月に渡仏し、パリに約2ヵ月滞在して舞台や戯曲を勉強しています。金子や貴族院議員西園寺公望が、資金援助したとされています。

明治24年の中村座での公演中、音二郎は金子の口利きで枢密院議長伊藤博文の宴席に招かれ、その席で葭町の芸者「奴」^{よし}（本名：小山貞）^{やつこ}と出会います（出会いには諸説あり）。奴は伊藤や牧野伸顯^{のぶあき}など政官財界にもひいき筋が多く、伊藤の後見により一本立ちをしたと言われています。奴は音二郎と親しくなり、27年に金子の

金子堅太郎（明治20年代前半）

媒酌で結婚。その後、奴は「貞奴」の芸名で音二郎の舞台に立つこととなり、一座の看板女優となります。同年、川上一座は日清戦争を題材とした演目が当たりし、12月には帝国博物館前での公演に皇太子殿下（後の大正天皇）の台覧を賜りました。28年には東京歌舞伎座での公演が実現し、役者としての頂点に立ちます。

音二郎は自前の洋式劇場を持つことが念願で、明治29年6月、神田区三崎町に「川上座」を建てました。しかし、一座の人気は次第に陰りを見せ、約3年半で人手に渡りました。この頃、32年4月から35年8月にかけて、一座は2度の欧米巡業を行いました。アメリカ・イギリス・フランス・ロシアなどを廻り、イギリス皇太子（後のエドワード7世）やロシア皇帝ニコライ2世も観劇するなど、興業は大成功を収めました。そこには、駐米公使小村壽太郎（ハーバード大学時代に金子と同居）や駐仏（34年駐露）公使の栗野慎一郎（金子と同様に福岡藩士の家柄）の支援がありました。

明治44年死去。葬儀には金子をはじめ、西園寺首相や37年に駐仏大使となっていた栗野も参列しています。大正3（1914）年、谷中に銅像が建てられ、台座には金子と栗野による銘文が刻まれました。銅像は昭和17（1942）年に金属供出のため撤去されましたが、台座は現在も谷中霊園に残っています。（高橋）

【参考文献】

井上精三『川上音二郎の生涯』（葦書房、昭和60年刊）

井上理恵『川上音二郎と貞奴 明治の演劇はじまる』（社会評論社、平成27年刊）



川上音二郎誕生碑
福岡市博多区古門戸町「沖濱稻荷神社」



「川上音二郎」像
（福岡市博多区上川端町）



谷中霊園に建つ台座に刻まれた金子と栗野の署名

◆戦没学徒 山谷進陸軍中尉について

令和8（2026）年1月、大阪府在住の山谷昌生氏から、日本大学工科出身で昭和17（1942）年に出征した伯父山谷進に関する問い合わせがあり、併せて遺品も保管しているとの情報をいただきました。調査の結果、当課所蔵の専門部工科建築科昭和17年9月卒業生（戦時体制下での半年繰り上げ）の卒業アルバム「建立会 第十二回卒業記念」に山谷進が掲載されていて、絵画部の集合写真にも写っていることが分かりました。

北海道出身の進は、日本大学卒業直後の10月1日に旭川の第27歩兵聯隊に入営しました。18年2月幹部候補生に採用され、4月には甲種幹部候補生（予備役士官要員。なお乙種は同下士官要員）に選抜されています。5月には前橋予備士官学校に入校して、初級将校として必要な教育を受けます。

「太平洋戦争」を含む第二次世界大戦では、航空兵力が欠かせない戦力となっていました。そのため、陸海軍共

に飛行搭乗員の急増を計ります。18年7月、高等教育機関出身者から採用の新制度として、陸軍特別操縦見習士官の募集が開始されました。これまで、陸軍は予備役士官候補対象者であっても、採用時は二等兵（操縦候補生は一等兵）からのスタートでしたが、この制度では最初から見習士官となり、下士官最上位の曹長の階級が与えられました。同年10月に1期生約2,500名が採用されました。

同時期、幹部候補生として訓練中の者にも航空操縦生の募集がありました。採用された進は、11月1日に曹長に進級し、熊本県の大刀洗陸軍飛行学校菊池分教場（12月菊池教育隊に改組）に転属。飛行

学校では講義から始まり、12月1日からは飛行訓練が行われました。19年3月に操縦課程を終えると、満州に展開する飛行隊に配属されました。7月には少尉（士官の最下位）に任官して予備役に編入されますが、戦時下のため同日臨時召集されています。

同年8月、三重県の北伊勢飛行場で編成が開始された飛行第102戦隊に配属されます。この部隊は、大東亜決戦機と称された最新鋭の四式戦闘機「疾風」を装備し、沖縄戦が始まった20年3月には都城（宮崎県）の飛行場に展開しました。沖縄戦では多くの特攻機を送り出します。飛行第102戦隊は、特攻機の周囲を護衛・援護する重要な任務を担っていました。沖縄に上陸したアメリカ軍に対して、陸軍は4月6日から特攻主体の航空総攻撃を開始しました。5月11日、第7次総攻撃に出撃した進は、沖縄の北飛行場（アメリカ軍は上陸後に読谷飛行場として使用）に攻撃を敢行し、その上空付近で戦死、満24歳でした。同日附で中尉に進級しています。陸軍時代の履歴は、昌生氏に提供していただいた軍歴などを基にまとめました。

本年6月、昌生氏と面談し、遺品などの関連資料30点（写真アルバム1点、同単葉17点、その他12点／出征祝いの日章旗2旒・戦死後授与された勲章や勲記などを撮影、その中には予備士官学校や飛行学校時代の自筆の手簿（ノート）や祖父宛の遺書も含まれていました。遺書には日付がありませんが、「戦闘操縦者として挺身し」「飛行機と運命を共にせしものなり」との記述から、操縦士教育を終えた後に書かれたと思われます。貴重な資料の撮影と掲載を許可していただいた山谷昌生氏には、心より御礼申し上げます。



専門部工科絵画部（進は後列右から3人目）「建立会 第十二回卒業記念」（写真アルバム）より



陸軍時代のノート（山谷昌生氏所蔵）



陸軍少尉軍装姿
（山谷昌生氏所蔵）



遺書（山谷昌生氏所蔵）

（高橋）

活 動 報 告

令和8年1月～令和8年6月

(大学史に関する活動)

○調査・研究

1月9日	学徒兵に関する資料調査（昭和館）
1月28日	創立者金子堅太郎に関する資料調査（国立国会図書館）
1月29日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会（國學院大學）
2月3日	創立者金子堅太郎に関する資料調査（国立国会図書館）
2月25日	校友関係資料調査（国立国会図書館）
3月9～11日	学祖山田顕義及び荒川五郎関係資料調査（山口県岩国市、広島県廿日市市・広島市）
3月12日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会（神奈川大学）
3月18～20日	創立者金子堅太郎及び校友関係資料調査（福岡県福岡市）
4月3日	創立者金子堅太郎関係調査（都立谷中霊園）
4月17日	学祖山田顕義関係資料調査（埼玉県川口市）
5月7日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会（日本大学会館）
5月26日	旧横須賀校地に関する資料調査（神奈川県横須賀市）
6月6日	松波仁一郎及び学徒兵に関する資料調査（大阪府大阪市・岸和田市）
6月22日	学生関係資料調査（早稲田大学）
6月23日	山岡萬之助関係資料調査（学習院大学）
6月26日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・総会・記念講演会（立正大学） 全史料協関東部会総会・記念講演会（波止場会館）

○展示

1月8日～3月31日	昭和の学生（日本大学会館2階）
4月1日～7月31日	100年前の駿河台（日本大学会館2階）
5月29日～	医学部の100年（日本大学病院1階オープンラウンジ）

○研修・講演

2月28日	新潟桜門会 大学史講演（ホテルグローバルビュー新潟）
4月9日	藤沢高等学校・中学校 学祖及び自校史講演
5月7日	スポーツ科学部 大学史講演
5月8日	鶴ヶ丘高等学校 学祖講演

日本大学大学史ニュース

第31号

令和8年9月30日

編集・発行 日本大学広報部広報課（大学史）

〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24

TEL 03-5275-8444